

## はじめに

中国の広東省あたりで奇妙な肺炎がはやっていると私が知ったのは、今年二月のことだった。当初、中国では「非典型肺炎」あるいは「非典」などと呼ばれていた。内容はよくわからなかったが、字面からしてなんとなく典型的ではない特殊な肺炎なのか、と思う程度であった。当時の日本では「新型肺炎」あるいは「謎の肺炎」と呼ばれていたが、その後、WHOがその症状から、SEVERE ACUTE RESPIRATORY SYNDROME（重症呼吸器症候群）と名づけ、その頭文字をとってSARSといわれるようになった。

当初、日本では感染者がいなかったこともあってか、はるか遠い国のことのように思われていた。その後、中国からの情報や各機関のホームページなどで何とはなしに気にしていたが、まさか自分がこの「非典」で中国を歩き回ることになることは、夢にも思わなかった。

報道関係者でもなく、医師でもない、一企業人の私が、感染症であるSARSについて学び、情報を集め、そして中国を歩き回らざるを得なくなったのは、私がいる会社の業務内容のおかげである。

私のいるウェルビーという会社は、中国に進出している日本企業のリスク管理や日本からの留学生・観光客の医療アシスタンスサービスを一〇年前から手がけている。日本では東京に本社を置き、大阪、福岡に支店、中国では現地法人として上海、北京、広州などの一七都市に拠点を置き、日本語医療通訳

やサービスタッフを駐在させ、活動を行なっている。また中国国内に八〇余の提携病院を持ち、患者の症状に合った適切な病院の紹介も行なっている。例えば交通事故にあつて大怪我をし、緊急手術が必要となったが、近くに適切な病院がないような場合、提携病院から医師を現地に派遣し、応急処置しながら適切な病院まで緊急搬送を行なう。また、病気の症状の微妙な言い回しは一般の通訳には難しいため、医師に微妙な症状を正確に伝えて、患者が的確な治療を受けられるよう医療通訳をしたり、お産や歯科疾病など海外旅行傷害保険の対象とならないものもサポートしている。

海外に出るとき、多くの人は海外旅行傷害保険に加入する。この保険には緊急医療アシスタンスサービスがついているが、保険は万能ではない。保険の加入前から存在する生活習慣病といわれるものや慢性病的なものは海外旅行傷害保険の対象にならない。また、保険には免責規定があり、事故で怪我をしても、内容によっては保険の対象にならないものがある。さらに病気や事故が起きても、保険が適用されるか否かの判断までに時間を要することもある。保険会社はある程度の情報を収集した後にアシスタンスサービスを発動するのである。しかし、急病患者にとってはそんなことは関係なく、治療が最優先である。ウエルビーのアシスタンスサービスは海外旅行傷害保険と関係なく、患者第一を考えて対処する。そして、結果的に保険の対象であれば、後から保険会社に請求を出すのである。

このようなサービスも行なっているため、新聞やテレビで毎日のようにSARSの報道がされるようになる。当然ウエルビーにも会員企業の方々からさまざまな照会が入るようになってきた。「マスクを現地に送りたいが、日本では売り切れといわれた。どこで手に入るのか?」「現地に消毒液を送りたいが、どうしたら送れるのか?」「帰国者はある期間は絶対に隔離すべきか?」などである。

私たちも中国からの情報や日本で得られる情報を整理し、それぞれ個別に提供させていただいていた。しかし、ことの重大性から、個々の照会ベースではなく、こちらから積極的に情報を発信していく必要

があると判断し、四月一八日に感染症の専門医である大利昌久先生のご協力を得て、東京商工会議所で「SARSセミナー」を行なった。おそらく日本で最初のSARSに関するセミナーであつたと思う。会場の関係もあり、八三社の方々しかご出席いただけなかったが、セミナーの資料はさらに多くの方々にご利用いただいた。

またウエルビー社のホームページに「SARSコーナー」を設け、中国からの情報やWHOなどの情報と併せて、毎日更新していった。三月二〇日の開始から、七月二八日の中国北京市衛生局のSARS患者ゼロ宣言までの間に、実に一三七万二七四〇件のアクセスをいただいた。五月のアクセスは単月で四六万四九四二件であり、当時の日本国内における関心の高さがうかがわれた。

四月に入ってから、私は大利先生と一緒に、上海、北京、香港、大連、青島とSARS流行の真つただ中に飛び込んだ。不安はあつたが、「感染症の権威の大利先生が一緒だから」と自分に言い聞かせた。女房からは、なんでわざわざそんなところに行くのかと嫌がられたが、「いざという時は諦めてくれ」と心の中で思いつつ、中国に飛び出して行った。目的は、ウエルビーの現地会員企業の方々にSARSの実態を知っていただくことと、そしてSARSに関する情報提供である。中国では「情報隠蔽か?」などと騒がれており、はたしてどのような情報がどの程度まで現地で提供されているかわからなかった。そこで、実際に確認したかつたし、また現地企業の方々とは危機管理に関する意見交換も行ないたかつた。

現在、SARSは取りあえず沈静化した。しかし、そのウイルスの性質上、冬場にかけて再発現する可能性が高いともいわれている。インフルエンザも急な発熱や咳が出る。初期にはSARSと見分けがつかないという。SARSとインフルエンザが重なり、混在して流行したらどうなるのだろうか?

現時点でいったん終息しているが、特效薬やワクチンがない以上侮れない。日本で流行したら中国以

上のパニックになることは間違いない。日本では中国ほど厳しく統制がきかないだろうし、朝夕の通勤ラッシュを想像するだけでも、感染拡大の速さは想像いただけると思う。咳をするにも口を手で覆うこともなく平気で人に向かってする輩が多い最近の日本では、なおさらのことである。

それはともかく、会員企業の方々のために、この数カ月緊急課題として中国のSARSと向き合ってきたわけであるが、この情報を企業内に留めることなく、家族のため、子どもたちのため、友人たちのために、知り得たことを伝えたいと思った。それは私個人の気持ちだけではなく、ウエルビーの社員一同の気持ちでもあった。そのようなわけで、実際に見てきたSARSに侵された中国社会の実体を知っていたかどうかとともに、セミナーでの質問、あるいは現地で各企業が実際にとっているリスク管理や従業員が直面している問題点などを、ウエルビーと大利先生の協力を得て本書にまとめた。

「来たるべき時」が来ないことを祈るが、個人の生活から企業のリスク管理まで、幅広く役立てていただきたいと考えている。また、SARSだけでなく、深く潜在していてこれから顕在化してくると思われる、抗生物質に耐性のある結核などの感染症をも考慮に入れて、これからの参考にさせていただければと思っている。

取材を目的に中国に行ったわけではないので、情報が充分ではないかも知れない。また、重ねてお断りするが、大利先生のご協力を得てはいても、私はSARSの専門家ではない。この数カ月「緊急性」に追われてSARSに関わってきた、いわばシロウトである。十分な情報を得ているとは限らないし、この間にSARSの研究はもっと進んでいるかも知れない。中国以外の国々でのSARSについては、多くのみなさんと同じように、報道されていること以外は知らない。それでも何らかのお役に立てるかと思ひ、急ぎ書き下ろした。あくまでも「いま時点で知り得た」実態であることをお断わりしておくとともに、本書を一一読いただいた後も、各種の情報にアンテナをめぐらしていただきたいと願っている。